

## ◆巻頭言◆

## 環境問題について今私にできること

香川県環境保健研究センター所長 橋本和久



当センターは、平成27年4月から全環研協議会中国・四国支部長の任を受け、私は本年4月から支部長を務めさせていただくこととなりました。常日頃、皆様から多大なるご協力をいただき心より感謝申し上げます。

「玉藻（たまも）よし 讃岐（さぬき）の国は国柄（くにがら）か・・・」万葉集の柿本人麿呂に詠まれているように、奈良時代の香川の海は、海底に揺らぐ海藻が見えるほど透明度の高い海でした。

江戸時代には、津田の松原、松ヶ浦、有明浜が白砂青松の名所として知られ、昭和9年には瀬戸内海が国立公園第1号に指定されました。私達の祖先は、古くから瀬戸内海を愛し、その恵みを享受しながら調和を保って暮らしてきました。ところが、高度経済成長期には、「瀕死の海」と呼ばれるほど環境が悪化して、赤潮による漁業被害等が発生し、美しい瀬戸内海を保全するため、昭和48年の瀬戸内海環境保全臨時措置法の制定から昭和53年の特別措置法による恒久化に至りました。

しかしながら、有機汚濁・栄養塩の改善と対策、藻場の喪失と再生、海ごみ問題、人と海とのつながりの希薄化などの課題があり、これらに対応するため、本県では「交流と賑わいのある海」、「美しい海」、「生物が多様な海」の実現を目指して、人と自然が共生する持続可能な豊かな海づくりに取り組んでいます。

これらの取組は、各自治体でも工夫を凝らして取り組んでおられることと思いますので、当支部からも積極的に情報発信していければと考えています。

本原稿を執筆している時期は梅雨明けでありましたが、九州北部での記録的な豪雨に続き、東北や北陸地方でも甚大な被害がありました。当支部の中国地方でも平成26年に豪雨による土砂災害があり、同じ場所に積乱雲が次々と発生する「バックビルディング」と呼ばれるメカニズムの解説を見て、私は脅威を感じました。

このほか、ゲリラ豪雨や竜巻、気温が35℃を超える猛暑日と熱中症患者の増加、海流の変化による水産資源の減少、デング熱・ジカ熱などの熱帯・亜熱帯感染症やヒアリなどの特定外来生物の発生リスクの高まりなど、地球温暖化による影響が身近に迫ってきているのではないかと感じざるを得ません。

20世紀後半に地球温暖化が提唱され、1992年のリオデジャネイロでの地球サミット、1997年の京都議定書に代表されるように、先進国が中心となって温室効果ガスの削減に取組み、その後、枠組が見直されて2015年のパリ協定では、先進国・途上国すべての国で排出削減に取り組むこととなりました。しかし、今年になって、米国の新政権が離脱宣言するといった事態が生じています。経済やエネルギー安全保障を優先する現在の国際政治の中では、かつて1980年代に生まれた「持続可能な発展」といった概念は失われたのでしょうか。

瀬戸内海の環境の悪化は、わずか50年前からと言われています。地球温暖化の影響は、化石燃料を本格的に使用し始めた200年前あたりからといわれています。人類史上の数世代で未来の地球環境を変えていることがわかった今、大きく軌道修正する必要があるのではないのでしょうか。

私は、環境保健研究センターという部署に配属されていても、このようなグローバルな環境問題に立ち向かうべきがないことにジレンマを感じています。

当センターは、平成14年に衛生研究所と合併し、環境科学部門と保健科学部門に分かれて業務を行っています。公害・廃棄物対策の研究機関として、ダイオキシン類などの各種分析機器の整備や、自然環境を担当する職員がいます。また、地域保健の拠点として、バイオセーフティレベル3の検査施設を有し、新型インフルエンザの遺伝子解析や、食中毒の検査体制が整備されています。

地方環境衛生研究所としての存在意義が問われている昨今、微力ながらも地域の環境・保健衛生の向上に貢献すべく、積極的に環境・衛生学科の学生や保健医療関係の実習生などの受入れをするとともに、他の試験・研究機関との共同研究など模索しています。また、次世代型調査研究として、環境科学と保健科学の人材や機器を活用した農薬や食中毒等の調査の試みも始めています。

皆様方におかれましても、環境問題に寄せる想いやご苦勞をお察しします。今後とも当支部活動を通じて、情報交換・共有・発信に努めてまいりますので、皆様のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。